4 中　世

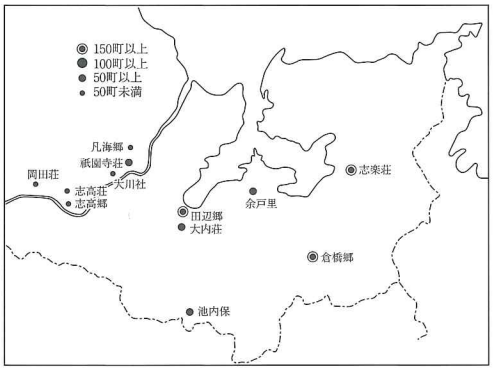
鹿原の金剛院は、その縁起に平安時代末の久安２年（1146）に鳥羽天皇の皇后得子（美福門院）の御願所となり、平忠盛を奉行として三重塔をたて、阿弥陀如来が安置されたと記されています。

天台僧慈円が“武者の世のはじまり”と記した保元･平治の乱は、この美福門院も関わって起った源氏・平家のからむ争いです。あの美しい金剛院の景観からは、想像できない動乱の時代を迎えたのです。そして、平安貴族の社会はあらあらしく若い武士の生み出す新しい気風の世界に舞台をゆずったのです。中世の幕開けです。

荘園の時代

中世は、今の舞鶴市のような行政区画ではなく、荘園をひとつのまとまりとしていました。荘園は地方の有力農民が開発した土地です。この土地は権力者に寄進され、開発した農民は権力者の庇護（ひご）のもとで実質的な管理者となりました。

舞鶴市域の荘園は、『広隆寺縁起』にみえる志高荘がもっとも古く、倉橋荘、志楽荘などが平安時代末期には成立しています。中世の荘園の実態は正応元年（1288）の田数帳をもとに、長禄３年（1459）頃成立したとみられる『丹後国諸荘園郷保惣田数帳』で明らかになっており、市域のほとんどに荘園が成立していたようです。



荘園分布図

鎌倉時代

源頼朝によって開かれた鎌倉幕府は、武士を御家人として組織し、彼らを荘園の地頭として配置しました。また、各国に守護を置いて、さまざまな政治体制を整えていきました。武士の世のはじまりです。

鎌倉時代の文化は“質実剛健”といわれますが、それは武士の大多数がもともと農民であったことも一因です。また、それまでの中央や貴族の文化にかわって地方や庶民の文化が台頭してきたからだともいえます。

重文　松尾寺の仏舞

市指定　宝筐印塔（田井）

快　慶

源平の戦いで、焼かれ荒廃した南都奈良の仏像復興の大号令がかかり、その南都に集った彫刻家仏師の中に運慶と快慶がいました。

この二人は、新しい時代の気風をとり入れ雄渾で、新鮮な写実的表現をおこないました。

この日本を代表する仏師の作品が、舞鶴に３躯あります。金剛院の執金剛神立像、深沙大将立像、松尾寺の阿弥陀如来坐像です。

近年、重源の『作善集』の中に高野山新別所に快慶の手になる四天王、執金剛神、深沙大将がおさめられたと記されていることがわかりました。金剛院のものは、これが移動したものらしく、美福門院の御願所としてのかかわりが、名品を遺したと思われます。

他にも、多祢寺の仁王像、圓隆寺や興禅寺の毘沙門天など、当地の鎌倉時代を代表する仏像が多くのこされています。

重文　執金剛神立像（金剛院）

重文　阿弥陀如来座像（松尾寺）

鎌倉新仏教

中世の大きな特徴は、仏教が身近なものとなっていったことです。平安仏教の天台・真言密教が、山をおりて大衆の中に入りこみ、鎌倉新仏教といわれる多くの宗派がうまれました。 中には、一向宗のような、強い力で結ばれた宗教集団や、時宗のように、踊りや念仏で人びとに熱狂的に支持されるものなどがありました。

また、禅宗が中国から新しく入ってきて、臨済宗や曹洞宗を開きました。

舞鶴の東地域には、14 世紀から、普明国師や、谷翁道空、曇翁などが臨済禅をもたらし、西地域では、竺翁雄仙が桂林寺を開いて、曹洞宗の基盤をつくりました。

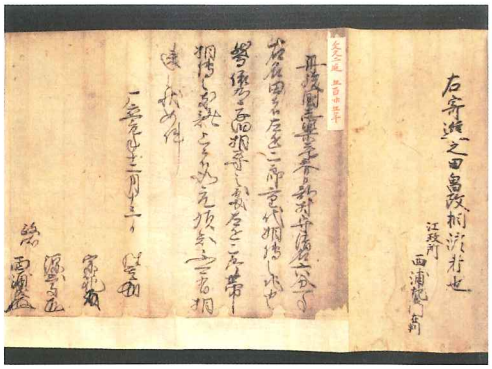
室町・戦国時代

中央では、後醍醐天皇と足利尊氏によって鎌倉幕府が倒されました。二人はやがて分裂し、足利尊氏は光明天皇を擁して征夷大将軍となり室町幕府を開きます(北朝)。後醍醐天皇は吉野に逃れ南朝を開きました。南北朝の動乱は、約60年間に及び、三代将軍足利義満によって合一されました。舞鶴には、南朝方の遺品として後醍醐朝による金剛院の禁制木札や、南朝年号が刻まれた登尾兵衛の「御正体鏡」があります。しかし、金剛院や登尾は北朝の足利尊氏が醍醐寺に寄進した志楽荘の中にあります。また、近くの松尾寺も真言宗醍醐派で修験僧の道場でした。このことから、志楽荘も南北朝の動乱に巻き込まれていたことがわかります。 志楽荘に伝わる梅垣西浦文書は、当時の地名が現在の地名に比定できることから、領主関係や村の成立などこの時代の様子をよくとらえています。

河辺の祭礼芸能は、この頃の農事にかかわる願いと時代背景を色濃くのこし、豊作を祈っています。

また、室町幕府が臨済宗に帰依したために、それまで、密教の隆盛によって盛んだった仏像彫刻は下火になり、逆に禅宗が求道の場つくりを重視することから、環境としての庭や建物にすぐれたものが多くのこされるようになりました。金剛院塔婆（三重塔）もこの時代を代表する建築で、斗栱（軒を支える枡組み）など楼閣建築の粋がこらされています。

御正体鏡（八幡神社）



梅垣西浦文書

一方、民衆には時宗や一向宗のように、おどりや念仏によって仏と合一化しようとする仏教がむかえられました。

道端には阿弥陀の板碑などの石造物が盛んにつくられました。宝篋印塔や五輪塔、石灯籠も、中世の時代からはじまるものです。

この時代、農業だけでなく、商業や金融、などが大きく発展しました。しかし、応仁の乱を経て戦国時代に突入すると、とぎれなく戦乱は続きます。「自力救済」や「一揆」という言葉が中世を代表するように、人びとは様々な有縁によって身を守ろうとしました。武家と公家、都市と地方、大陸と伝統、支配層と被支配層それぞれに文化を生み、それらが影響しあって融合していきました。階層をこえ、日本列島がいろんな意味で攪拌され、わきかえっていた時代ともいえましょう。

河辺八幡神社の祭礼芸能

山城と土豪

応仁の乱を経て戦国の時代となると、山の多いこの地では、戦略の拠点として、物見の場や、防御陣地として多くの城がつくられました。遺跡分布調査では170城以上に達しています。

山頂を削平し、曲輪（くるわ）をもうけ、竪堀（たてほり）をほって、容易にあがれないようにつくっています。また、島にある城や、海際にある城は水軍の城ではないかと考えられます。

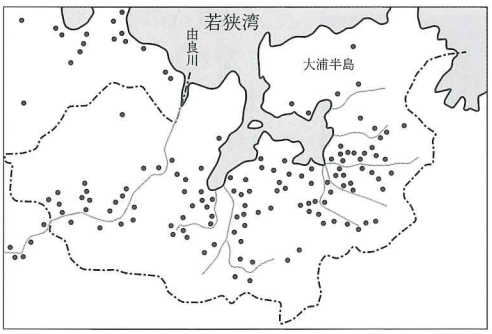
加佐郡は若狭、丹波との国境にあり、丹後守護の一色氏と若狭守護の武田氏の一統との争いがたえまなかったことをしめしています。

主な城として、溝尻城、女布城、中山城、志高城などがありました。

南北朝期の山城として、荒張城では、北朝方の吉川経久が丹後を攻めた時（建武4年、1337）、攻防戦が行われています。

倉梯城では、永正13～14年（1516～7）、若狭守護武田氏と一色家臣団との戦いがあり、籠城した一色氏守護代延永春信（のぶながはるのぶ）は、武田・朝倉・朽木の連合軍に攻められ敗走しました。両軍の死者は2000名を超えたといいます。（東寺過去帳）この倉梯城は現在、溝尻城に比定されています。

この頃の土豪に組織される武力集団は、ふだんは、農民とかわらぬくらしをし、いざというときは、武器をもってはせ参じるといった形をとっていたと思われます。 山城の主で城をおりて農民化した者も多いようです。



山城分布図

舞鶴湾

丹後水軍のふるさと

凡海郷の存在や松尾寺の開基が海人であることなどから、舞鶴湾内の入江や島陰に、古代からの伝統をつないだ水軍の舟がもやっていたと考えられます。あちこちに、舟溜り、舟かくしなど水軍にかかわる土地名が残っています。

織田信長の一向一揆の北庄攻めには、一色、大島、桜井などの水軍が参加しています。

細川氏が織田軍として、この地を攻めたときも、桜井と最初に交渉して味方に引き入れたといいます。

大俣城跡